

主題科目 「農作物を知る」 レポート課題
「私自身ができそうな被災地の農業再生について」

以前、テレビのCMで、「福島は元気です」などと謳い、某ジャニーズグループが福島産の野菜や果物を食べるシーンが放映されていた。私はそれを見たときに、確かに福島産の作物はメディアが騒いでいるほど危険なものではなく、イメージ良く安全性を主張したいのはよくわかるが、やはりどうしても疑ってしまっていた。何度そのCMを見ても、それは変わらなかった。ここまで疑い深いのは私くらいなのかもしれないが、やはり本当に安全かどうか、というのは自分自身が身をもって体感する以外にはないのだろうと考える。

これを踏まえて、私自身が被災地の農業復興のためにできることを次のように考えた。まず大前提として、友人などの数人のグループで、福島の農地に出向くことである。そして、それぞれがその場で「までい工法」などの効果的な除染方法など、土壌の仕組みというものを学び、それを受けて実際に農作業に励んでみる。時には農家の人とコミュニケーションをとりながら、そもそも農業というのがどんなに大変か、それに加え放射線の影響を被っている福島の農業従事者の方はただ農業を営むより数倍苦勞されていること、一方で農業のすばらしさなどを、作物を使った料理を食すことで、感じる。一泊二日くらいの滞在がベストだろう。そして最終的には、実際に福島で体験したこと、感じたこと、福島の現状などをグループでまとめて、公に発表するのである。何を使って発表するか、についてだが、できるだけ多くの人々に知ってもらえるような手段を用いればいいと思う。

というように、ここまで自分ができるところを一挙に流れで説明したが、正直これだけではありきたりのように思われるかもしれない。しかし、重要なのは最後の発表の部分である。この発表の中で、グループに属する全員がそれぞれ、自分が福島を訪れる前後での福島や農業に対するイメージの変化や率直な感想というのを、一見するとマイナスイメージになりかねないネガティブな感想も含めて「ひたすら正直に」言うのである。なぜ私がこのようにしたらいい、と思ったのかというと、私が思うに、テレビなどのメディアは、この福島の放射線や農業の問題に対して、両極端な伝え方をしている、と思うからである。つまりはこういうことである。あるところでは、「放射線や原発の脅威は震災から4年たった今でもおさまってはいない…」などと言い、ひたすら情報の受け手の危機感を煽るような表現をし、またあるところでは逆に、私が最初に述べたCMに見られるように、危険性を一切感じさせず、疑いたくなるくらい安全性を全面に押し出す表現がみられ、良さと悪さを両方伝えるような表現をしていることがあまりない（もちろんそういう表現方法が難しいことも理由の1つだとは思いますが）。これによって、無意識に日本人の多くの人の間には、「結局どっちなんだ」というような不安感が渦巻き、なかなか事態が好転しないのではないかと思うのである。そこで、上に述べた発表の際の、各々が正直に意見・感想を言う、ということが生きてくる。数人いれば、皆が皆ひたすら悪いイメージを言うことはないだろう。かといって、皆がひたすらに良いことばかりを並べる、といったこともないのでは

ないか。日本人は性格的に、いくら好きなように感想を述べてくださいと言われても、多少は農家の人のことを鑑みたりして、100%の本音は言わない人が多いだろうから、このくらいがちょうどいいと思われる。これにより、この発表を聞いた人々は、実際に福島の農地を訪れた人の、プラスとマイナス両方を含んだ率直かつメディアとは違う人間味ある意見に触れることができ、メディアにより引き起こされる疑念や危機感を必要以上に感ずることなく、福島の農業についての知識を増やし、ひいてはその人たちが福島の農地に出向くきっかけとなりうるかもしれない。

もちろん全員が全員この方法で福島の農業に関心を持ち、全員が復興に協力するとは到底思っていない。しかし、結局は人を動かすのは人であるから、ここまで述べてきたようなことに私自身に関わることで、農業の復興を目指す風潮はごくわずかかもしれないが作れるし、これが堅実的で良い方法なのでは、と考える。

私が考える方法は以上である。といっても、私を含め多くの方は、なかなか福島に実際に行くことに気乗りしないだろう。福島に3日滞在することで浴びる放射線量と、飛行機で成田とニューヨークを往復することで浴びる放射線量は、後者の方が大きい、ということが講義で挙げられていた。私はそのことが初耳でとても驚いた。いかに自分が情報を知らないかということを知った。たぶん他の多くの人もそうだろう。そういう状況の人々の足を福島に向かわせるにはどうしたらいいか…。と考えたときに、1つ思いついた。大学生にしか適用できないので汎用性には欠けるかもしれないが、先ほど説明した一連の試みを、大学において必修化するのである。もちろん単位も出る。こうすることで、強制ではあるが、若者の目を被災地の農業にむけさせることができる。さらには、この必修の経験を通して、全く農業に興味もなかったのに、被災地農業の再生に尽力したいと思うようになる学生が出てくるかもしれない。溝口先生も配布資料のなかでおっしゃっていたが、今の大学生は画一的だと思う（それは私も含めて）。東大はまだいい方だが、ほとんどの大学では学部が入学当初から決まり、それだけで視野を狭め、思わぬ可能性を失わせてしまいかねない状況にある。私はそもそも文系と理系、という垣根をつくることもあまり良いことだとは思っていない。普通に生活している中でも、文系もしくは理系、片方の知識のみで良いということはある。だから、天才的に理系の才能に優れているとか、そういう特別な場合を除いて、どの人も、文系理系さまざまな学問を広く学ぶ必要があると思うからである。そうした状況を打開するにはやはりある程度力づくの策を講ずることも必要だと思うので、このような必修化する、という方法に至った。

最後の方は課題の趣旨とずれてしまった気がしますが、私の考えは以上です。今回は大変興味深い講義をありがとうございました。